

---

# アンドロイド・ラブ 2

壇 敬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンドロイド・ラブ 2

### 【Nコード】

N9873E

### 【作者名】

壇 敬

### 【あらすじ】

科学技術の発達と宇宙局の思惑と乗組員夫婦の事情が合わさって、深宇宙へ旅立った「スカイライナー」号。だが、事態は思わぬ方向へと…。

「エリカ」

私はもう1度、妻の名前を呼んだ。

「エリカ、聞こえないんだね？」

「もう、ホントにダメなのか？」

名前を呼んでも返事をしてくれない。

もう2度と、動き出すことはない。

妻のエリカは機能を停止した。

私達夫婦は深宇宙の探査のために、探査宇宙船「スカイランナー」

で船内時間で48年前に地球を出発した。

「スカイランナー」にはグラヴィティエンジンが搭載され、速度は、光速の33パーセントまで可能だ。

だが、この加速に人間は耐えられない。

それに、深宇宙探索の旅に出るのだ。

いくら加速出来ても、人間が生きて帰れる保証はない。

そこで、発達したサイボーグ技術がそれを支えた。

肢体の全てを置き換えることが可能になったのだ。

そう、脳までもが解明されて置き換えが可能になった。

脳の全てが解明された訳ではないが、おおよそ使えるだけの知識の蓄積は出来ていた。

コンピュータ技術、とりわけチップ製造理論において、3次元回路

技術の発明で処理能力も容量も飛躍的な進歩を遂げた。

脳解明知識とサイボーグ技術とCPUチップ技術が融合して、極めて脳に近いものを作ることが出来るようになった。

それも、実際の脳より小さいサイズで。

我々夫婦は、宇宙へ旅立つ5ヶ月ほど前に交通事故にあった。

ひどいものだった。

2人とも高次機能障害に陥り、既にベッドからは起き上がれない状態だった。

生きているのが不思議なくらいだった。

そこに、宇宙局の役人が訪ねてきた。

「大変失礼ですが…」

「今のままでは、あなた達夫婦に未来はありません」

「私ども宇宙局にご協力いただければ」

実際のところ、我々夫婦に未来はなかった。

地球上で暮らすには、莫大な費用が掛かる。

我々夫婦には稼ぎも蓄えもない。

宇宙局の申し出は、我々夫婦にとっては願ってもないことだった。ただ、生身の人間でなくなることを除いては。

新しい身体になるのに、時間は掛からなかった。

手術が終わって目覚めた時には既に新しい身体だった。

しかも、眠りから覚めただけの感覚だ。

そして、自由に身体が動く、話せる、聞こえる、見える。

事故のことなど、まるで無かったかのような。

妻のエリカは歩いて私に近づき、ハグした。

再び、妻のエリカをこの手で抱きしめることが出来るとは思っていなかった。

気持ちは涙が流れたが、アンドロイドの身体にはその機能は搭載されていなかった。

抱き合っている我々夫婦に、宇宙局の担当官は、静かに言った。

「ご希望なら、以前の身体をお見せできますが」

我々夫婦は、その申し出を受け入れた。

興味本位ではなく、我々の真の姿を記憶しておこうと思ったのだ。安置室に入ると、2つの身体が横たわっていた。

傷つき、変形し、欠損した肉体。

だが、その肉体に懐かしい、愛おしさを感じた。

「これが『第1の死』か」

自分が、死んだのかどうか分からない、不思議な感覚だった。

我々夫婦の出発は、派手なものだった。

宇宙局が大々的に宣伝したからだ。

出発するまでは、あらゆるメディアの取材を受けた。

24時間忙しかったが、既にアンドロイドの身体。

食べる必要もないし、眠る必要もない。

もちろん疲れることもなかった。

だが、騒がれたのも出発して1年くらいだった。

木星軌道辺りまでは、随行の船があったりして取材が続いた。

だが、そこからはグラヴィティエンジンによる重力加速に入るため通信が難しくなる。

「ここまでは計画通り、順調に進んできました」

宇宙局管制室のオペレータは静かに告げた。

「ここからは人類にとっては未知の世界です」

「出来る限り通信の努力はしますが、限界があります」

「それに、誰にも貴方達を助けることは出来ません」

「計画通りに進むことを祈念します」

「グッドラック！」

重力加速に入った「スカイライナー」は、半年もしないうちにヘリオスポーズを超え、カイパーベルト、オールトの雲を超えて星間域に達した。

そこからは、地球の通信は途絶えがちになった。

何せ、1回の通信に1日以上掛かるからだ。

ここからは、夫婦だけの時間が始まった。

地球にいた頃と同じように、愛を語ることもあれば、激しい喧嘩をすることもあった。

夫婦とは、人生を共にするパートナーだ。

宇宙局の目論見は正しかったように思う。

だが、出発時の技術は完成されていた訳ではなかった。まず、観測機器の一部が使用不可になった。

そして、これがもつとも重要なことだが、我々夫婦をメンテナンスする装置の一部が故障した。

それは、バックアップシステムだ。

我々夫婦の身体にはメモリーキューブがある。

2の32乗を3乗した容量があるのだが、万一のためにバックアップが出来る。

その装置がダメになったということは、予備部品で身体は直せても只の人形なのだ。

そして、脳の知識と人間の技術も十分でなかった。

妻のエリカが挙動不審になったのだ。

時に鬱になり、時に躁になる。

そして、身体制御も上手く出来なくなった。

どんなにチェックしても不具合が認められなかった。

たぶん、オリジナルとのミスマッチがあったのだろう。

そして、この事態を迎えた。

「エリカ、もう私の話を聞いてくれないんだね」

妻のエリカは『第2の死』を迎えたのだ。

「スカイライナー」は秒速10万Kmで、宇宙を突き進んでいる。

計画では、50年経過の後に停止し、地球への帰還を始めることになっている。

だが、私はプログラムを書き換えた。

このまま進んで、宇宙の果てに行くつもりだ。

正常に動作していた頃のエリカはこんなことを話していた。

「地球へ帰るなんてもったいないわね」

「いつそ、このまま宇宙の果てに行きたいわ」

「この身体なら、できるのよね」

「あー、行ってみたいわ」

「だけど『宇宙の果て』なんてあるのかしら？」

宇宙局は言った、誰も助けにいけないと。

だが、立場が逆転したことも言えるのだ。

私達が遠い宇宙空間で何をしようとも、宇宙局にはどつすることも出来ないのだ。

私は、妻の希望を叶えたい。

その想いだけで、私は船を進めていた。

…いつ辿り着くか解らない、果ての世界へ。

（後書き）

久しぶりの投稿です。

読後の感想、よろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9873e/>

---

アンドロイド・ラブ2

2010年10月28日05時01分発行